

分科会	小6年④	郡市名	岡崎
提案者	岡崎市立竜海中学校		成田 道俊

## 1 研究主題

持続可能な社会の実現を目指し、学びを問い合い、自己の責任を考える社会科の授業  
 - 6年「水害に強い安心できる町づくり」の実践を通して-

## 2 はじめに

岡崎市社会科部では、研究主題「持続可能な社会の実現を目指し、学びを問い合い、自己の責任を考える社会科の授業」を受け、昨年度の実践（3年「火事からくらしを守る」）から次のような成果と課題が得られた。まず、導入では子どもたちにとって身近な事象を取り上げ、火事に対する意識を高め、意欲的に追究することができた。また、話し合う活動から、地域の一員としての責任感で活動する消防団員に迫り、その活動の大切さに気づくことができた。さらに、単元の終末において、学習したことを表現して伝える活動を通して、地域社会の一員として活動する意義を実感できた。しかし、自己の責任を考えると、地域全体に目を向けさせるための支援はどうあるべきか、また、客観的な根拠にこだわって考えを深めるための手だての工夫について課題が残った。

これらの成果と課題を踏まえ、「地域社会の一員として自己の責任を考えるための単元構想と教師支援の工夫」に重点を置き、4年次の研究を進めた。

## 3 研究の基本的な考え方

### （1）研究主題のとらえ

学級の実態をとらえ、子どもたちへの願いをかけ、研究主題「持続可能な社会の実現を目指し、学びを問い合い、自己の責任を考える社会科の授業」を次のようにとらえた。

#### **持続可能な社会の実現**

現代社会に山積する多くの課題を克服していくには、個人主義的な考え方だけではなく、社会全体を見通した行動をしていかなければならない。様々な立場、多様な価値観を認め合いながら、よりよく生活できる社会の形成に向けて主体的に考えていこうとする姿勢を育む必要がある。そのために本研究では、問題意識をもち、調べ学習や自治体へ自分たちの願いを考え伝える活動を通して、未来像を予測して計画し、持続可能な社会の実現を目指していきたい。

#### **学びを問い合う**

確かな調べに基づいて構築した自分の考えが友達の考えに触れることで、自分の考えの確かさや変容に気づくことができる。そうした過程を経ることで、自分の学びを問い直し、新たな見方や考え方に気づき、自己の考えを深めていくことができると考える。そのために本研究では、地域の方との聞き取り調査を行ったり、友達とのかかわりから自分の意見を見つめなおしたりすることを通して、多面的、総合的に考える力を育てていきたい。

#### **自己の責任を考える**

持続可能な社会の実現には、「市民の社会参加」が不可欠である。生活の質の向上を目指して、地域や友達とのかかわりを考える中で自分の立場やかかわり方を明確にし、社会の一員として地域社会や自らの生活へ働きかけていくことができると考える。そのために本研究では、将来にわたって地域のために進んで行動しようとしたり、地域社会と自分たちのつながりについて考えたりすることのできる態度を育てていきたい。

### （2）研究単元の設定理由

昨年度の研究の成果から、本年度は、地域の防災対策についての問題を取り上げ、6年「水害に強い安心できる町づくり」を研究単位として実践を行った。

本単元は、平成20年8月末に起こった岡崎市に流れる伊賀川の水害の被害について調査し、子どもたちが住民にとって安心して暮らせる町づくりについて考えていく。現在も水害対策としての河川改修や周辺の整備が進められているこれらの工事は、市役所と住民、市議会議員らが情報交換を重ね、県や市の議会で議論・採決を通して、予算化され、実施されている。しかし、子どもたちには、地域や関係機関が、自分たちの町のために尽力してくれていることを目にする機会はあまりない。このように子どもたちの見えないところで、住みよい町づくりについて取り組む様子を学ぶことは、市民参画の意識を高めるのに価値のある教材であると考えた。学習を通して、水害を防ぐ努力をしている人々は、自分たちの町のために協力していることに気づき、「自分事」として地域の問題をとらえ、自分の考えに責任を持つことができると考えた。「自分事」とは、地域に関する切実な問題を、自分たちの責

任において解決しようとする意識をととらえた。

(3) 目指す子ども像

- ・ 地域の問題に対して、意欲的に課題解決をしていくことができる子ども
- ・ 取材して見聞きしたことや調べて分かったことを根拠に、自分の考えをもつことができる子ども
- ・ 地域や友達とのかかわりを通して、地域に関する問題を「自分事」としてとらえ、地域の一員としての責任について自覚できる子ども

(4) 研究の仮説

- 仮説1 子どもたちにとって①身近な教材を用いた単元構想を計画し、導入の段階において、②問題意識をもつ場面を設定すれば、子どもたちは、地域の問題に対して意欲的に課題解決をしていくことができるだろう。
- 仮説2 問題を追究する段階において、③自分の考えがもてる調べ学習の工夫とその支援を行い、④確かな調べを生かした話し合いの場を設定すれば、取材して見聞きしたことや調べて分かったことを根拠に、自分の考えをもつことができるだろう。
- 仮説3 ⑤子どもたちが描く地域の将来像を提案する場を設定すれば、地域や友達とのかかわりを通して、地域に関する問題を「自分事」としてとらえ、地域の一員としての責任について自覚できるだろう。

(5) 研究の方法

仮説1に対する手だて

- ① 単元構想の工夫・・・子どもたちが意欲的に追究活動を行っていくために、学区を流れる伊賀川の洪水に焦点を当てて単元を構想し、水害対策に尽力する人々や子どもたち同士がかかわる場を設けて、追究を進めていく。
- ② 問題意識がもてる教材との出合わせ方・・・学区に起きた切実な出来事が子どもたちに伝わるようにするために、水害の様子について視覚に訴える情報を取り入れた場面を設定する。

仮説2に対する手だて

- ③ 聞き取り調査を取り入れた調べ学習・・・子どもたちが水害の被害や住民の思いに気付くために、伊賀川流域の住民や水害対策に尽力された方に聞き取り調査を行う場面を設定する。
- ④ 調べたことを生かした話し合いの場の設定・・・今後の自分たちの町の将来について切実感をもてるようにするため、改修工事や岡崎市の取り組みについて調べ学習から分かったことをもちに、子どもたちが価値判断をし、自分の意見がもてる話し合いのテーマを設定する。

仮説3に対する手だて

- ⑤ 安心して暮らせるための町の将来像の提案・・・子どもたちが、水害に対する課題に向き合い、どのような町が将来にわたって安全かを考えるために、水害から町を守るための方法や取り組みについて考えて、話し合う場を設定する。

(6) 単元構想

	学習課題と子どもの意識の流れ	教師の活動・支援
疑問を抱く  粘り強く取り組む・地域や人と	<p><b>第1時 明治時代の伊賀川の改修工事を振り返ろう</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 浅井浅次郎さんや地域の人々の協力で伊賀川の流れを変えたんだよ。</li> <li>・ 今の工事も、洪水があったから川の工事をしているんだね。</li> </ul>	<p>○&lt;手だて①&gt;随時</p> <p>○伊賀川は過去にも水害を繰り返してきたことに気づくために、4年生で学習した明治時代の伊賀川の改修工事の地図や写真を提示する。</p> <p>○学区に起きた切実な出来事が子どもたちに伝わるようにするために、水害の様子を伝えるニュース映像と被害がわかる写真を提示する。</p> <p>&lt;手だて②&gt;</p> <p>○子どもたちが水害の被害や住民の思いに気付くために、水害の被害にあった伊賀川流域の住民に聞き取り調査を行う場面を設定する。</p> <p>&lt;手だて③&gt;</p> <p>○「水害が起きにくい町づくり」を目指す学区の方の取り組みを学ぶために、彦坂さんを招き、水害後の町の人の動きや市に要望したことなどを話せる場を設定する。</p> <p>&lt;手だて④&gt;</p> <p>○水害対策の必要性に対する切実感が高めるために、水害から町を守るための取り組みが十分に話し合う場を設定する。</p> <p>○調べ学習では、自分の疑問に</p>
	<p><b>第2・3時 伊賀川の水害のときの様子を調べよう</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 伊賀川の水があふれて住宅へ広がっているよ。</li> <li>・ マンションにいる人は上の階に避難したみたいだよ。</li> <li>・ 復旧には、町の人や消防団、ボランティアの方が協力があったんだね。</li> </ul>	
	<p><b>第4時 水害のあと、被害にあわれた方はどんな思いだったのだろう</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ どんどん水が来るなんて恐ろしい。</li> <li>・ 警察や消防にもなかなか連絡が取れなかったんだね。</li> <li>・ 洪水が起きにくい町づくりをしてほしいという願いがあるんだね。</li> </ul>	
	<p><b>第5・6時 住民の願いをどのように岡崎市に届けたのだろう</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 住民の声を集めて彦坂さん（総代さん）が市に要望したんだね。</li> </ul>	
	<p><b>第7時 町を水害から守るために、今の取り組みで大丈夫だろうか</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 対策が進んだし、工事もしているから大丈夫なんじゃないかな。</li> <li>・ 改修工事やほかの取り組みについてもっと調べたいな。</li> </ul>	
	<p><b>第8時 伊賀川改修工事の様子や取り組みについて調べるための計画を立てよう</b></p>	
	<p><b>第9～11時 伊賀川改修工事の様子や取り組みについて調べよう</b></p>	

積極的にかかわる学習を見つめなおす	浸水計 警報機 連絡網の改善 防災ラジオ 防災メール インターネット 改修工事			<p>ついて、問題の解決が図れるように、十分な資料と時間を確保する。＜手だて③＞</p> <p>○全員が確かな調べ学習をし、納得のいく考えをもって話し合に臨めるようにするため、個別の対話を通して助言・支援をする。</p> <p>○今後の自分たちの町の将来について切実感をもって話し合うことができるようにするため、「今の取り組みで命が守れるか」というテーマを設定し、調べたことをもとにした価値判断できるようにする。＜手だて④＞</p> <p>○子どもたちが、水害に対する課題に向き合い、どのような町が将来にわたって安全かを考えるために、水害から町を守るための方法や取り組みについて考える場を設定する。＜手だて⑤＞</p> <p>○提案が吟味されたものになるように、水害対策のアイデアから本当に必要なことについて話し合う場を設定する。＜手だて⑥＞</p> <p>○自分たちの町の将来に対する思いを伝えるために、考えたアイデアを岡崎市に提案する場を設定する。</p>
	第12時 町を水害から守るために、今進めている工事や取り組みで私たちの命が守れるか			
	<ul style="list-style-type: none"> <li>改修工事が終われば、3年前の豪雨でも大丈夫だよ。</li> <li>岡崎市は、被害が少なくなるように、情報を伝える工夫をしているよ。</li> <li>でも、もっとひどい豪雨がきたら、本当にこれで大丈夫なのかなあ。</li> </ul>			
	第13時 町を水害から守るために必要なことは何だろうか			
	地域住民の連携 普段の備え 情報収集 早急な河川の整備			
	第14・15時 水害に強い町づくりプランを考えよう			
	<p>＜自分たちでできること＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>避難経路を伝えるための案内板を設置する。</li> <li>連絡網を整える。</li> <li>普段から水害に対する訓練を行い、心構えをしておく。</li> <li>近くの人と声を掛けあう。</li> </ul>		<p>＜岡崎市にお願いしたいこと＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>浸水警報装置が遠くまで聞こえるようにしてほしい。</li> <li>体が不自由な人も安全に避難できる体制を整えてほしい。</li> <li>水害が起きたときに消防署に連絡がつくようにしてほしい。</li> </ul>	
	第16時 水害に強い町づくりプランを岡崎市に提案しよう			
	<ul style="list-style-type: none"> <li>これからも、安心して暮らせる町にするために、ぼくたちも力になれる人になりたいな。</li> </ul>			
	<p>地域の問題に対して、意欲的に課題解決をしていくことができる子ども</p>	<p>取材して見聞きしたことや調べて分かったことを根拠に、自分の考えをもつことができる子ども</p>	<p>地域や友達とのかかわりを通し、地域に関する問題を「自分事」としてとらえ、地域の一員としての責任について自覚できる子ども</p>	

#### 4 研究の実際

##### (1) 抽出児童の設定

抽出児童として、児童A、児童Bの2人の変容を追いながら、仮説に対する有効性を検討していく。2人の児童の実態と教師の願いは、以下のとおりである。

児童A：児童Aは、授業中はほとんど発言をしない。授業への取り組みも、真剣さが少ないことが多い。伊賀川は、児童Aの自宅に近いということもあり、自分の地域の問題としてとらえて、自分の考えをもってほしいと願った。

児童B：児童Bは、真面目な性格で、調べ学習など、粘り強く行い、自分の考えを持つことができる。社会的事象を客観的にとらえることができるものの、問題に対して他人事のように考えてしまう。問題を「自分事」としてとらえ、地域のために自分たちにできることを考えてほしいと願った。

##### (2) 実践について

##### ①単元との出会い

伊賀川は、これまで何度も氾濫を繰り返し、住民を苦しめてきた歴史がある。大雨が降ると合流する乙川から水が逆流し、堤防が押し流され洪水が起きていたという。第1時では、4年生のときに学習した地域単元である明治時代に行われた伊賀川の改修工事について振り返り、過去にも水害が起こり、住民が苦勞していた事実を再確認した。また、今も伊賀川では、工事が行われているがなぜなのかを聞いたところ、理由を知らなかったので、工事現場から理由を探りに行った。子どもたちは、看板を見たり工事関係者に聞き取りをしたりし、平成20年8月末に起きた水害と関係していることをつかむことができた。

##### ②伊賀川の水害の様子について調べよう

そこで、第2時では、平成20年8月末に起きた洪水の様子について、調べていくことにした。伊賀川周辺で洪水が起きた時の様子をビデオで視聴した。「壁に水の跡がついていた」「家の中まで水がきて、物がたおれてぐしゃぐしゃになっていた」など、ビデオから気づいたことを出し合った。その後、感想を書き、発表した。「私のうちの方は、あまり被害がなかったけれど、こんなにすごいことになっていたなんて思わなかった。」「水の流れる勢いが速くて、びっくりした。」と水害の様子に驚いているようだった。

##### 【資料1 第2時の児童Aの授業日記】

ビデオを見て、その事故の場所から家が近いので、知っていただけ、いろいろな所でも、水害があって、家のドアが壊れていたり、駐車場の車とかが水につかっていたりして、すごい広範囲に被害があってすごい大変なことだったと思いました。

##### 【資料2 第2時の児童Bの授業日記】

そういえば、私も被害者で、車がなくなりました。もう一つ思い出したことで、わたしたちのところもコンクリートが茶色になっていたため、ほうきではいていた。

た。また、「マンションの1階に水が流れていて、夜、ずっと人の声がしていた。こわかった。」など、体験している児童は、その様子も伝え、そのときの緊張感や、子どもたちにも感じ取ることができた。児童A・Bは、【資料1・2】のようにノートに感想をまとめた。

第3時では、伊賀川の水害について調べを進めた。水害の状況や被害の様子について調べるため、学区の人にインタビューを行った。子どもたちは、水害の被害が大きかった地区の5世帯に、班ごとに分かれて聞き取り調査を行った。

**【資料3 第3時で児童Aの班がインタビューで聞き取ったこと】**

- ・夜中、1～2時の間にどんどん水が上がってきた。
- ・家の中に、コイや金魚が入ってくる。
- ・水に浸かった物のほとんどがごみになってしまった。
- ・水は、2階の床から20cmのところまできた。
- ・ぬれた服からは、下水のにおいがして、洗っても消えにくい。
- ・ボランティアの人が物を運び出すのを手伝ってくれた。

**【資料4 第3時で児童Bの班がインタビューで聞き取ったこと】**

- ・下水道のふたが外れ、水があふれてきたら危険のサイン。すぐにあふれてきた。
- ・近所の人に教えてもらうまで水が床上まで来ていることに気づけなかった。
- ・夜中に、床上浸水し、1階は全部だめになってしまった。
- ・ガラス戸が割れ、大きな家具が流れてきた。
- ・ボランティアの方に手伝ってもらったが、元の生活に戻るの不安があった。
- ・元の生活に戻るのに、3～4か月かかった。

児童Aは、地区の中でも、一番浸水した家を訪問した。子どもたちは、「いつの出来事か」「どんな被害があったか」「元の生活に戻すためにどんな苦労があったか」について聞くように指導した。子どもたちは聞き取り調査で、水害が深夜1時ごろ

起こったこと、ほとんどの家で、1階の天井まで水が来たこと、ボランティアに家財道具を運ぶのを手伝ってもらったこと、室内の改装工事などを終え元の生活に戻るのに、数か月単位で時間がかかったことなどをつかむことができた。児童Aは、【資料5】のように水害の恐ろしさを感じる事ができた。また、児童Bも聞き取り調査から、【資料6】のようにと水害時に近所で声をかけ合うなど、助け合う様子があったことを知ることができ、その大切さもつかむことができた。

**【資料5 第3時の児童Aの感想】**

ぼくは、水害から家が近かったので、知っていたけれど、家の中とかくわしくわかったのでよかったです。今思うと、大変だったと思いました。本当に水害は、めいわくでめんどくさいと思います。こわいことだと思いました。

**【資料6 第3時の児童Bの感想】**

ガラス戸が水の力で粉々になるとか想像がつかみませんでした。でも、ガラスが割れるくらいの勢いで、水が入ってきたら、さすがに怖いと思いました。近所の声がかからなかったら助からないかもしれないと感じました。

第4時では、水害の被害にあわれた方がどんな思いでいるのか、子どもたちで話し合った。「雨の日が来るたびに不安になる」「水がどんどんくる様子がおそろしい」「思いもよらない出来事なので、これから油断ができない気持ちになる。」など被害にあわれた方の立場に立った発言が上がった。児童Bは、「元の生活に戻ることができるのか不安な気持ちになると思います。もしかしたら、もう戻らないかも思っていたかもしれない。」と発言した。復旧の大変さを聞き取りで得たことを生かして話すことができた。そこで、「伊賀川の水害について住民はどのようなことを願っているだろうか」についての考えを発表したところ、【資料7】のような意見が挙がった。どれも、聞き取り調査から住民の方の気持ちを考えることができたものである。また、これらは、水害に対する地域の解決したい課題でもある。このような話し合いの中で、「住民の願い（将来に対する不安）をどうやって解決したのか」が疑問として子どもの発言から挙がった。

**【資料7 第4時 子どもたちが考える住民の願い】**

- ・もう洪水が起きてほしくない。
- ・伊賀川の水が来ないように。
- ・早く対応を。命が救えるように。
- ・安全で安心できる町づくり

**③住民の願いをどのように岡崎市に届けたのだろう**

前時の疑問を解決するために、水害の後に住民の方の意見を取りまとめて、岡崎市に様々な要望を行った愛宕学区総代会長である彦坂さんに来ていただき、話を聞く機会を設けた。子どもたちは、彦坂さんの話から、水害で一番困ったこととして、情報が伝わらず、水害の状況も伝えられなかったということが分かった。電話も混んでいて消防署にも市役所にもかけてもつながらず苦労された経験から、総代から直接岡崎市の職員に電話がつながるようにしてほしいことや、河川の水量がどこにいてもわかるようにしてほしいということなど

**【資料8 第6時の児童Aの授業日記】**

ぼくは、災害から復興するまでにいろいろな手間がかかっているんだと思った。市役所が国の補助金を使って、復興できてよかったと思います。要望したことがかなって、HPとかも見やすくてきっとこれから、役に立っていくと思う。

について総代会で意見をまとめて要望したということだった。これら要望したことが岡崎市で検討され、実現されたことを写真や岡崎市のホームページを使って説明していただいた。このような事実を知り、児童Aは、【資料8】のような日記から、町の人々の意見が実現したことが分かった。

#### ④町を水害から守るために、今の取り組みで大丈夫だろうか

彦坂さんたちの要望から、岡崎市が様々な施策を行ったことが分かった子供たちは、水害に対して安心感を抱く児童も出てきた。そこで、町を水害から守るために、改修工事や岡崎市の対策で大丈夫か話し合うことで、子どもたちの意識が明らかになるようにしたいと考えた。

話し合いでは、「浸水警報器」や「改修工事」の取り組みから安心だという意見(C44、C49)と「いざという時に行動できるか」など、これまでの対策では、安心できないという意見(C45、C46)にわかれた。「頭が真っ白になって」や「警報器が鳴っても人が助けられるのか」など、水害の危機的な様子をイメージしながらの発言だった。児童Aは、改修工事の取り組みから、C49のように「今の取り組みで大丈夫」という立場をとった。前時の日記からも、ホームページなどが整備され、それらが「役立つと思う」との思いがあったことから「大丈夫」との考えを持ったことが分かる。C60から、想定外の雨がきたら大丈夫か、と聞かれて、「被害を少なくするための工事」だとの考えを示した。しかし、授業後、児童Aは、授業日記から【資料10】のように「どちらでもない」との立場をとり、考えが揺れていることが分かる。改修工事の意味を理解しつつ、どこまで想定外のことを考えた工事かつかんでないためである。児童Bは、友達の見解から、【資料11】のように、町の人が助かるか疑問に思うような意見をもつことができた。

##### 【資料10 第7時の児童Aの授業日記】

ぼくは、意見が変わって、どちらでもないと思います。理由は、想定外すぎると、工事の意味がなくなってしまうけれど、この工事は、被害を少なくするためにしていると思うから。

##### 【資料11 第7時の児童Bの授業日記】

警報機などの設備がこわれてしまったら、意味がないのでは？警報機が使えても、体の不自由な人とか、本当に助けられるのだろうか。

#### ⑤伊賀川改修工事の様子や取り組みについて調べよう

子どもたちは、伊賀川改修工事や水害に対する取り組みについて、調べ学習を始めた。子どもたちは、それぞれ、「調べたいこと」「調べ方」について計画を立てた。自分の知りたいことを自分で見つけられるようにするため、教室の後方に資料コーナーを用意し、伊賀川の工事のパンフレットなどを掲示して自由に調べることができるようにした。掲示物は、数枚印刷をしておき、必要なものをファイルから持っていけるようにした。また、岡崎市の取り組みについて調べるためにインターネットを用

##### 【資料12 第10時 伊賀川の改修工事や岡崎市の取り組みについての児童Bの活動】

児童Bは、「どこまでの被害を想定しての工事か」「耳が聞こえない人など、障がいのある人にどう水害を知らせるのか」について調べた。被害の想定については、資料コーナーから、前回の水害の1.7倍の水の量が流せる工事をしていることを分かった。また、「障がいのある人にどう知らせるか」については、市役所の防災危機管理課の人に電話をし、聞き取り調査をすることができた。そこで、「防災メール」や「ホームページでの情報」など、視覚による情報で伝えることができると分かった。また、別の資料から、「総合防災訓練」について関心を持ち、多くの人が参加していることもつきとめた。

##### <調べた感想>

「総合防災訓練」には、1万6千人が参加する予定だったと知って、すごいと思った。サイレンが聞こえない人には、防災メールなどで伝えることができることも分かったが、本当に助けることができるのか、不思議に思った。



いて岡崎市のホームページを閲覧して調べられるようにした。児童Bは、【資料12】のような調べ活動を行い、登録した人に配信している「防災メール」で、障がいのある人にも危険を伝えることができる、市の担当者から聞き取ることができた。しかし、本当に救

うことができるのか疑問が残っている様子が、【資料13】の調べたあとの自分の考えにも表れている。児童Aは、資料14の調べ学習を終えて、「どちらでもない」の迷いから「命が守れる」と自分の意見をはっきりさせることができた。様々な対策が効果を発揮すると考えていることが分かる。

【資料14 第11時 「今、進めている工事や取り組みで私たちの命が守れるか」について児童Aの考え】

ぼくは、町と命を守れると思います。前は、どちらか分からなかったけど、愛知県や岡崎市が税金で橋の高さや川幅を広くするなど、水が増えてもいい工事をしてきているし、防災ラジオ、浸水警報器、水位がパソコンで見られるし、川が危険になっても、町も被害が少なくなると思う。

⑥町を水害から守るために、今進めている工事や取り組みで私たちの命が守れるか

伊賀川の河川改修工事や岡崎市の取り組みについて、調べたことをもとに「今進めている工事や取り組みで私たちの命は守れるか」というテーマで話し合いを行った。児童A・Bは、【資料14・13】のような考えをもって、話し合いに臨んだ。児童Bは、平成20年8月末豪雨を教訓にできた防災訓練を紹介し、訓練をすれば命が守れると考えを発表した(C31)。同じように、「命は守れる」とした意見の中に、川に流れる水の量が大幅に増えること(C43)、浸水警報器や防災ラジオなどの設備の充実を図ること(C44,C47)、時間とお金をかけた工事であること(C50)などといった根拠を示した発言が聞かれた。前回の話し合いと比べ、浸水警報器のサイレンが5分間鳴ることや、ホームページから川の水位が閲覧することなど、調べ学習で得たさまざまな取り組みについて、具体的な発言が多く見られた。しかし、訓練と現場は違うこと(C32,C33)や、命の危機の時に情報を気にしていられるのか(C48)といった声もあった。調べ学習で、設備のことを調べているが、災害時に本当に生かせるか、想定しての発言であった。また、浸水警報器が鳴っても障がいのある人など情報が伝わらない人の命は守れない

(C49)、といった意見も出た。児童Bも同じことを疑問に思っていて、授業後の日記に【資料17】の下線部のような思いが残ったままになった。調べ学習を通して、岡崎市の取り組みに対する安心感

【資料16 第12時「今進めている工事や取り組みで私たちの命が守れるか」について児童Aの授業後の考え】

ぼくは、ほかの人の意見を聞いて、伊賀川の工事で被害が減ると思いました。理由は、いろいろな設備が整えられたおかげで、早く危険を知ることができるようになったと思いました。早く知ることができるので、その分逃げられると思います。

【資料17 第12時「今進めている工事や取り組みで私たちの命が守れるか」について児童Bの授業後の考え】

自分の意見は変わらない。防災訓練などをやって少しでも水害の時にどうするか、考えた方がいいと思うが、今日の話合いで、自然には限界がないので予想がつかないことが起こってしまうと大変なことになると思った。やっぱり体の不自由な人がそういう災害の時に不利になってしまうと思いました。

【資料13 第11時 「今、進めている工事や取り組みで私たちの命が守れるか」について児童Bの考え】

やっぱり私は、何とも言えないと思う。耳の聞こえない人にメールで知らせることができても、周りの人が気づいてあげないと命を守ってあげられないかもしれない。でも、訓練に行っていたり、水害に耐えられる工事になっていれば、みんな助かりそうだという気持ちがある。

【資料15 第12時の授業記録】

- C31 (児童B)：命を守ることができない人に意見ですが、総合防災訓練っていうものがあって、最近では21か所で9月のはじめの日曜日にやっていて、参加人数も1万6000人で、みんなで参加すれば、守れると思います。
- C32：児童Bさんの意見に反対で、訓練と現場は違う気がする。焦ってしまって、何をするかわからなくなると思います。
- C33：Kさんに付け足して、練習していても、実際はもっと雨降ってるかもしれないし、焦ってしまうと思う。  
(中略)
- C43：橋の工事で橋を上げたり、川幅を広げたり、いろいろな工事をしていて、だいぶ水の量、入る量が増えるし、H20の雨よりも少し多くても大丈夫になっている。
- C44 (児童B)：基本的に伊賀川の改修工事で改善されて、それであふれてしまうようだったら、浸水警報器がなるので、結構用意周到だと思います。
- T47：用意周到。なるほどね。
- C45：浸水警報装置は、5分間しか鳴らないし、5分間鳴ってても、聞こえなかった人はどうするんですか。
- C47：Sさんの意見にちょっと似ているかもしれないけど、もし浸水警報装置が壊れても、自分は、防災ラジオとかホームページで水位が見れるから大丈夫だと思う。
- C48：浸水警報器が、5分間しか鳴らないっていうのは、水がすごい勢いで何分間も来てるのに5分間っていうのは少ないと思う。Mさんの意見は、ホームページを見ればわかるって言ったけど、水害が起きて命の危機にあっているときに、パソコンをいちいち検索して、自分の命が危ないのに私なら絶対、気にしてられないと思います。
- C49：僕は、守れないと思います。理由は今伊賀川が工事しているけど、前回以上の雨が降ってしまって、浸水警報器が鳴るけど、耳が聞こえない人がいたり、情報が分からない人は、逃げ遅れてしまう可能性があるから、これで命がなくなってしまうから、守れないと思います。
- C50 (児童A)：僕は命を守ることができるので、工事に岡崎市と愛知県は予算45億円も出しているの、ここまでして被害を少なくしようとしているので、守れると思います。

だけでなく、本当に住民の人たちを救うことができるかを考えることができた。

児童Aは、話し合いを通して、【資料16】のように、設備が整えられたおかげで、危険を早く知って避難できるという点から、「命が守れる」との考えを発言することができた。

### ⑦町を水害から守るために必要なことは何だろうか

前時の話し合いでは、水害に対するさまざま取り組みから「命が守れる」と考えた児童と、水害対策をとっていても、不十分で「命は守れない」と考えた児童に分かれた。これらは、住民の方も同じような思いをしているのではないか、という話をした。そこで改修工事や岡崎市の対策以外にも、水害から町を守るためのアイデアはないか考えた。

#### 【資料18 第14時 水害対策として自分たちでできること】

- ・すぐに避難所へ行けるように、地図に書いて貼っておく。案内板みたいなものを作る。
- ・避難できるように必要なものを用意しておく。
- ・連絡網を作って、連絡をとれるようにしておく。
- ・いつ水害が起きてても冷静に判断できるように心がける。など
- ・普段から近所であいさつをする。声をかける。

#### 【資料19 第14時 水害対策として岡崎市にお願いしたいこと】

- ・浸水警報器をたくさん設置したり、遠くまで聞こえるようにしたりしてほしい。
- ・防災訓練の回数を増やす。
- ・植林をする。桜の木を切らないようにしてほしい。
- ・耳が聞こえない人にも分かるシステムを作してほしい。など

考えたアイデアをカードに書き、「自分たちでできること」と「岡崎市にお願いすること」に分けて、黒板に貼っていった。「自分たちでできること」では、【資料18】のように、いざという時に連絡が取れるようにするための連絡網を作ることや、避難場所や危険個所を知らせる案内板を作ることなどがあがった。児童Aは、町で避難できる建物や高台などを示した地図を作って配付することなら、自分たちや地域でできるのではないかと考えた。また、「岡崎市にお願いすること」では、【資料19】のように、設備を充実させる意見が多くあがった。児童Bは、連絡網を整備や非常袋を用意しておくこと、防災訓練の実施などを行えば、水害から町や人を守ることができるなど、いくつかのアイデアを考え、提案した。それらの中から、本当に必要な対策について話し合い、「ぼくらの町 伊賀川プラン」と題し、学級の提案をまとめていった。児童Bは、【資料20】の授業日記から、水害対策のアイデアを考える活動を通して、みんなで考えていけば水害から命を守れるのではという考えに変わってきた。児童Aは、【資料21】の日記から、一つ一つのアイデアが町を守るために大切なことだと改めて気づくことができた。

#### 【資料20 第15時 児童Bの授業日記】

いろんな対策を実行していけば、水害から町を守ることができるんじゃないかと少しずつ思うようになった。今までは、完全に助かるのは難しいと思っていたけど、みんなで水害をふせこうと考えていけば、命は守れるような気がしてきた。

#### 【資料21 第15時 児童Aの授業日記】

いろんな対策ができて、体の不自由な人も、助かってほしいと思った。どの意見も大切なことだから一つでも実現してほしいと思った。

### ⑧水害に強い町づくりプランを岡崎市に提案しよう

子どもたちが考えたアイデアを、岡崎市の防災危機管理課の方に伝えるために、代表児童5人が市役所を訪問した。「岡崎市にお願いしたいこと」だけでなく、「自分たちができること」も一緒に伝えた。どの児童も、学習してきたことを自信をもって発表することができた。職員の方からは、「災害の時には、まず自分の命を確実に守ってほしい。」「連絡網の案は、地域の方と話す機会があるので、伝えたいと思う。」という話をしていただいた。参加できた児童Bは、「自分の考えた話を聞いてもらえてよかった。連絡網の話が採用されるかもしれないので話をしてよかった。」と話した。次の日、市役所で訪問した児童Bは、「まずは、自分の命を大事にしないと、家族や周りの人の命を救えないことが分かった。」と、市役所の方から学んだことを学級に伝えることができた。



【写真1 岡崎市役所での提案】

## 5 研究の成果

### (1) 仮説1について

子どもたちは、4年生で学習した明治時代の伊賀川の改修工事を思い出したり、水害についての聞き取り調査をしたりした。子どもたちは【資料3・4】にある内容をつかみ水害の被害の大きさを実感することができ、伊賀川流域の町の防災対策に対して②問題意識をもつようになっていった。水害の被害や改修工事や岡崎市の取り組みを調べていく中で、自分の疑問を追究する姿が見られた。①単元を通して取り組んでいくことで意欲的に地域の問題に対して追究していくことができた。

## (2) 仮説2について

子どもたちは、伊賀川の水害の聞き取り調査を行う中で、【資料5・6】のように実際に体験した方の言葉から水害のおそろしさを切実に感じる事ができた。また、【資料12】のように資料コーナーを利用したりインターネットを利用したりして、水害対策についての自分の疑問について、深く追究していく事ができた。これらの確かな調べがあったからこそ、【資料13・14】のように自分の考え持ち、話し合いに参加する事ができた。③自分の考えがもてる調べ学習の工夫や個々に応じた支援は、有効であった。また、話し合いの活動では、【資料15・16】のように、④自分の調べが根拠となり「命が守れる」「命は守れない」のそれぞれの価値を、自分自身の調べから判断し、話し合いを行う事ができた。

## (3) 仮説3について

子どもたちは、自分たちの町に水害が起こらないようにするため、何ができるかを考えた。【資料22】のように、地域の将来を見つめ直し、自分の命も大切だが、お年寄りや近所の人ともいざという時に声が掛け合えるような町にしたいという思いがあらわれた。また、⑥自分たちの考えを提案する場を設定することで、【資料20】のように、水害から町を守るアイデアを考える活動を通して、町の将来について考えていく活動自体が水害対策につながっていくという意識をもつ事ができた。【資料23】のように、すぐにはできないけれど自分たちで実行できるようになりたいという思いは、地域の問題を「自分事」ととらえており、将来にわたって自分たちの町を大切にしていこうとする意識の芽生えであると考えている。

## 6 おわりに

岡崎市社会科部では、4年間の研究を通して、持続可能な社会の実現を目指し、学びを問い合い、自己の責任を考える社会科の授業を目指した。

「これまでの水害対策は、本当に自分たちや地域の人の命を守ることができるか」子どもたちは、地域の水害対策について調べ、岡崎市の取り組みや河川改修工事の有効性を考える事ができた。また、水害対策について考える活動を通して、地域の将来を真剣に考え、自分たちもかかわっていきたいという意識が表れた。問題意識を明確にした調べ学習や自治体へ自分たちの願いを考え伝える活動を通して見られたのは、未来像を予測して計画する力を身に付けていく子どもの姿である。これは、**持続可能な社会の実現**を目指す姿につながったと考える。

子どもたちは、地域の方から水害の様子を聞き取ることで、水が押し寄せる緊迫した状況を学ぶ事ができた。調べ学習では、水害対策が地域の安全につながっているか、地域の方はどう思っているかなど様々なことをもとに自分の考えをまとめる事ができた。そして、友達とのかかわりを通して、水害に対する町の安全性について考える事ができた。地域の方との聞き取り調査を行ったり、友達とのかかわりから自分の意見を見つめ直したりする事を通して見られたのは、多面的、総合的に考える力を身に付けていく子どもの姿である。これが、**学びを問い合う**姿だと考える。

子どもたちが水害対策を考えて話し合う活動では、「体の不自由な人も安全に避難ができるように」など、社会的に弱い立場の人を含め、地域の人々全体のことを考えた意見が多数あがった。この活動を通して、子どもたちが地域の人々のことを考え、町をよりよくしたいという思いが高まっていった。将来にわたって地域のために進んで行動しようとしたり、地域社会と自分たちのつながりについて考えたりする事を通して見られたのは、**自己の責任を考える**子どもの姿である。自分たちの町のために努力をしている人々や協力している人々に共感し、切実な問題を自分たちの責任において解決しようとする「自分事」としてとらえる姿は、自分の考えに責任を持つ姿だといえる。

このような子どもの姿を継続して育んでいくことが、持続可能な社会を実現していくための基盤となっていくのではないだろうか。

### 【資料22 第16時「ぼくらの町 伊賀川プランを提案して」 児童A】

ぼくは、みんなの提案を聞いて、やっぱりお年寄りの人に(対して)協力し合える町がいいと思いました。お年寄りが、パソコンで雨の量や深さが分かって、避難が大変だからです。他にも、新しい設備が整っているが、こわれていないか点検もした方がいいと思いました。最初は、水害から命は守れないと思っていたけれど、市の人のおかげで安心できる町になってきたと思う。一番大切だと思ったことは、自分の身は自分で守ること、その次に家族や近所の人を助けることが一番だと思いました。(中略)ぼくは、これからお祭りとかあいさつとか大事にして、近所の人を大事にしたいと思いました。

### 【資料23 第16時「ぼくらの町 伊賀川プランを提案して」 児童B】

水害の恐ろしさ、まず、人の命を奪うのは、もちろん、人の大切な思い出まで流されるのは怖いなと感じました。水害から町を守るために、水害を防ぐための工事や設備のことを勉強した。しかし、正直、工事に反対だった。お金を払って解決できるような問題じゃないと思った。無駄づかいではないかと考えていたが、45億円かかるけれど、2人の命をこれで救えることができるのではないかと、もっとこれから、多くの人の命を救うのではないかと考えた。もっと安心できるためのプランでは、防災訓練や植林、ゴミ拾い、助け合いなどいろいろな提案があった。すぐには、実行できないかもしれないけれど、自分たちでいつかやれたり、岡崎市の人に聞いてもらえたりできてので、やってよかったなと思った。